

吉原健一郎・俵 元昭監修：『CD-ROM版 江戸
東京重ね地図 検索データ・ブック』

発行 株式会社エーピーカンパニー

2001年9月 CD-ROM 14,800円

歴史史料の保存という観点から、高精細なデジタル画像によるデータベース化の作業が進められている。その結果は史料の利便性を考慮し、インターネット上での公開や店頭販売されるようになってきている。徳島大学図書館「近世古地図・絵図コレクション」、日本地図センターおよび紀伊国屋書店「明治前期測量2万分の1フランス式彩色地図」、国絵図研究会データベース作成委員会「江戸幕府撰国絵図の画像データベース」などがその例である。また、明治期の統計データから地図情報を作成するインターネットGISの試みもなされている(村山祐司・尾野久二「インターネットGISの開発」)。歴史史料のデジタル化は、すでに研究には欠かせない存在となっている。

とくに歴史的史料のデータベース化の中でも、膨大な情報量をコンパクトかつ容易に扱えるメディアとしてのCD-ROMの価値はますます高まっている。迅速測図や国絵図など、これまで大きく多量の紙を必要としてきたものが、次々とデジタル化されてきた背景には、保管、検索、補正・修正などの操作が容易なことなどがあげられるが、なんといっても、原史料を扱うことによる破損・損傷や保存などの問題に対して優れた側面を有していることが、その特色であるといえよう。

このような流れの中に今回ご紹介する「江戸東京重ね地図」も位置づけることができよう。この地図は、地図を収納したCD部と地図内に記載される地名についてのデータベースとなる「検索データ・ブック(288頁)」の冊子部から構成されている。

CDに収納された地図は、安政3年御府内・朱引内全域を明治初期の実測図(参謀本部陸軍部測量局(1883年)「東京五千分ノ一」、内務省地理局測量課(1885年)「東京実測全図五千分ノ一」、帝国陸地測量部(1881年)「東京近傍二万分ノ一」、帝国陸地測量部(1909年)「東京近傍一万分ノ一」)を1:2000~1:4000のスケールとしたオリジナルな復元地図である。また、尾張屋版切絵図との

比較も可能であり、御府内全町村名を幕府の史料によって補完している。したがって、23区の成り立ちを地図を使って明らかにしたり、大名屋敷の面積などの情報が約2万ポイントも掲載されている。

一方検索データブックは、B5版288頁にも及ぶ情報が掲載されている。地名に関しては公称地名と里俗地名を区別するなどの細かな配慮がなされた膨大なデータベースとなっている。とくに制作者の興味もあり、文学作品の中にみられる場所についての情報量は豊富である。

そもそも制作者の中川恵司氏は1994年に朝日新聞社から『復元・江戸情報地図(1/5,000, 1/6,500)』を出版させており、この購入者の要望に応えるかたちで増補改訂しデジタル化したものが今回の「江戸東京重ね地図」である。したがって、前書と見比べることにより一層デジタル化の優位性や改良点がよくわかるはずである。

なかでも特徴的なのが、歴史地図と現代地図(国土地理院発行1万分ノ1地形図)とのオーバーラップである。切絵図の任意の場所について、その比定をする場合、地形図のような現代的地図を横に置きながら対比をさせるというのが一般的であろう。この困難と経験を要する作業を、地図を重ねるという発想で実現させたことは評価すべきである。双方の地図ともに色の濃淡を可変することができ、歴史地図からも、現代地図からも相互にアプローチが可能となっている。発想のすばらしさとデジタル画像のなせる技であるといえる。この際生じる位置のずれを考慮しても、画期的といわざるを得ないであろう。ただ、歴史地図との双方向性を考えるならば、現代地図のインデックス・マップから検索できれば、よりわかりやすく対比できるはずである。また、地図中のランドマーク(例えば、川や道など)を鮮明にすることで、より端的に目的地を探索できるはずである。

歴史地図に描かれた地理的情報を現代地図に比定する作業は、困難かつ根気のいるものである。この作業を行い現実のものとした制作者の労苦をねぎらうと同時に、さらに改訂増補した新版の出版を心待ちにしたい。また、この種の地図がこれからも増えることを期待したい。

(山崎達夫)